

報告 古代山城 鞠智城跡の調査と成果

講演者紹介

村崎 孝宏（むらさき たかひろ）

熊本大学大学院文学研究科修士課程修了。熊本県教育庁文化課長補佐を経て、現在、熊本県立装飾古墳館分館歴史公園 鞠智城・温故創生館長。

古代山城 鞠智城跡の調査と成果

熊本県教育委員会 村崎 孝宏

はじめに

皆さんこんにちは、熊本県教育委員会、歴史公園鞠智城・温故創生館の村崎と申します。私の方からは本日、鞠智城跡の調査と成果につきましてご報告をさせていただきます。どうぞよろしくお願い申し上げます。



まず、鞠智城跡では昭和四二年から約半世紀に亘って、発掘調査を実施してまいりました。その間、平成一六年二月には「日本の歴史を考える上で特に重要である」ということで、史跡に指定をされております。また、現在発掘調査の成果を基に歴史公園の整備を進めているところでございます。平成二四年三月にはこれまでの発掘調査の成果を総括した総合報告書をまとめています。本日は、その報告書の成果を含め、鞠智城跡の調査と成果についてご報告をさせていただきたいと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。



図1 古代山城の分布

一 鞠智城跡の概要

これは、古代山城の分布になります（図1）。六六三年白村江の戦いの敗戦後、西日本各地に唐と新羅の連合軍が攻めてくるのではないかと、いうことを想定されまして、古代山城が築かれてまいります。その一つが、今回の鞠智城跡ということになります。想定されるルートとして、朝鮮半島に最も近い対馬に金田城、そして大宰府の周辺を守る形で古代の山城が築かれ、想定される侵攻ルート「瀬戸内海ルート」に沿って都を守るように古代山城が築かれています。『日本書紀』や『続日本紀』などの歴史書の中に一一の城名が出てまいります。そのほか、歴史書には記述がない同じ時代の山城もございまして、現在二七カ所の山城の存在が想定をされています。その中で現在、場所がわかっているも

のが二カ所ということになるかと思えます。これらの山城の中で「鞠智城跡」は一番南側にありまして、やや特異な場所、位置関係にあるということになります。

この鞠智城跡なのですが、七世紀後半、今から約一、三〇〇年、あるいは一、三五〇年前という言い方をしたりしますが、大和政権によって築城された古代山城というふうに考えられています。この「一、三五〇年ほど前」というあいまいな言い方をしましたが、これは、築城の記事が歴史書の中に出てこないということに起因しております。城が築かれる契機となった出来事は、先ほども申しました六六三年に朝鮮半島で起きました白村江の戦いです。白村江の戦いで敗戦をしたあとに築かれます。そもそも六六三年に白村江の戦いに至る原因というのは、六六〇年に朝鮮半島の南西部にあった百済という国、この国が東隣にあった新羅と、それから唐の連合軍から攻められて滅亡します。滅亡した後、百済の復興を支援するために援軍を送り白村江で戦った。そして、大敗をするようになります。ですから、その後に築かれた古代山城の中の一つとして、当時の古代日本の防衛体制の一翼を担った城と考えることができます。

鞠智城の位置は熊本県の北部にございます（図2①）。カルデラで有名な阿蘇がございまして、その阿蘇の外輪山から流れ出す菊池川という河川に近い位置に存在しています。ただ、場所的には菊池川の河口から約三〇キロほど上流にございます。内陸に少し入ったところに位置しています。それから、この部分に大宰府があり、その周辺に古代山城が集中しております。この大宰府からは、直線距

離で南に六三キロ離れています。全体の古代山城の配置からすると、やや特異な位置関係を示す場所に存在しているという城になります。

鞠智城の南側を通っていた、これが当時の官道の想定ルートになります(図2②)。このように想定される官道のルートが通っています。南の方から廻って熊本市内に入っていきます。それから福岡方面、大宰府方面に繋がります。また、阿蘇方面に行く、もう一つは山を越えると大分県北部にも繋がるという交通の要所にあることもこの地に築かれた一つの要因ではないかと考えております。また、この点線で描かれている部分が、古代の官道が整備される前の「車路」と呼ばれる道路のルートになります。鞠智城のすぐ南側を、官道以前の古い「車路」が通っていたであろうと想定されていますので、そういう意味でも重要な位置に築かれているということが分かります。

写真1が上空から見た鞠智城の写真になります。南東方

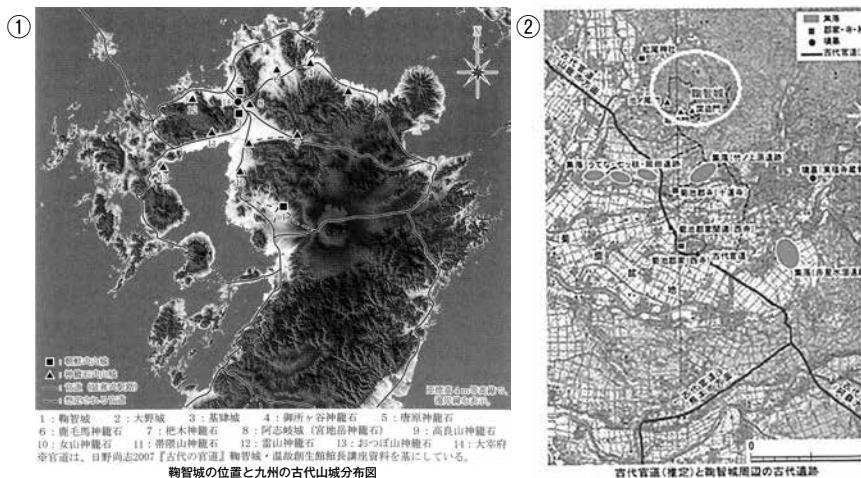


図2 鞠智城の位置



写真 1 鞠智城跡全景（平成 19 年度撮影）

向から撮影した航空写真です。ちょうどこのこんもりとした部分、ここが鞠智城跡になります。面積は五五^{ヘク}。見ていただいて分かるようにそんなに標高の高い地形ではありません。古代山城というと、どちらからいえば標高四〇〇^{メートル}を越える高い山に築かれるというのが一般的ですが、鞠智城の場合は一番低いところで九〇^{メートル}、一番高い場所で一七^{メートル}ということになりますので、比較的低い。建物が集中する長者原地区というエリアの標高が、だいたい一四〇^{メートル}程度ですので、全体的に低く、平坦な地形に築かれている山城ということになります。

鞠智城跡については、歴史書にも幾度か記録が見られます（史料 1）。一番最初

六国史にみる鞠智城 *『国史体系』吉川弘文館

甲申。令_二大宰府一繕_中治大野。基肄。鞠智三城_上。

(書き下し文)

〔甲申、大宰府をして大野・基肄・鞠智の三城を繕い治めしむ。〕

〔続日本紀〕文武天皇二(698)年五月二十五日条

丙辰。肥後国言。菊池城院兵庫鼓自鳴。丁巳。又鳴。

(書き下し文)

〔丙辰、肥後国言す、菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る〕

〔丁巳、又鳴る〕

〔日本文徳天皇実録〕天安二(858)年二月二十四・二十五日条

肥後国菊池城院の兵庫鼓自鳴。同城不動倉十一字火。

(書き下し文)

〔肥後国菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る〕

〔同城不動倉十一字火く〕

〔日本文徳天皇実録〕天安二(858)年六月二十日条

肥後国菊池郡城院兵庫戸自鳴。

(書き下し文)

〔肥後国菊池郡城院の兵庫の戸自ら鳴る〕

〔日本三代実録〕元慶三(879)年三月十六日条

史料 1 六国史にみる鞠智城

に出てくるのが『続日本紀』の文武天皇二年、六九八年に「大宰府をして、大野、基肄、鞠智の三城を繕い治めしむ」、要は修理させたという記述が出てきます。ですから、築城の時期、いつ頃築かれたのかということについては、これよりも前であろうということが想像されます。そこで、先ほど言いました、大野城、それから基肄城が六六五年に築かれていますので、ほぼ同じ頃に築かれただろうということで一、三五〇年ほど前という言い方をさせていただいたということになります。この『続日本紀』の記述の後、平安時代に入って八五八年の「兵庫の鼓が自ら鳴る」といった奇怪な現象として書かれています。その後も、同じように自ら鳴ると不動倉が一宇焼けたと、一一棟が火災にあったという記録があります。また、その後、

八七九年の「兵庫の戸が、自ら鳴る」という奇怪な記述を最後に歴史書の記録から姿を消します。ですから、六九八年から八七九年までの間の、少なくとも一八一年は、実際に存続をしたということ。が歴史書の記録から明らかにになります。

二 発掘調査の成果

図3は、鞠智城の平面図になります。この太い線で囲った部分が、鞠智城の範囲になります。城内の面積は五五^{ハシ}で、周囲の長さは三・五キロです。標高が約九〇^{メートル}から一番高いところで一七一^{メートル}。昭和

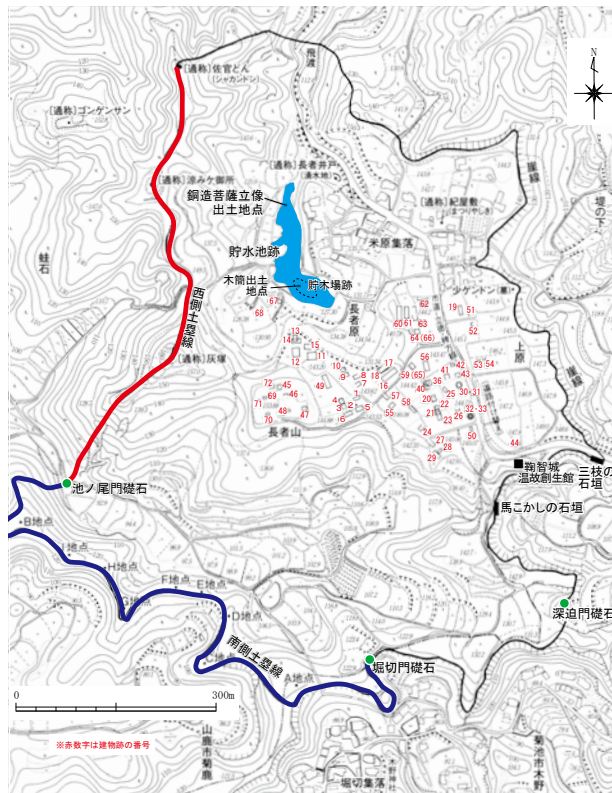


図3 城門跡と土塁の位置



図4 建物遺構配置図

四二年から、昨年、発掘調査を再開をしましたので、今年度で三四次になります。その成果としては、大まかには七二棟の建物跡、それから三箇所の城門跡、貯水池跡が確認されています。それから、土塁跡、この太い線が西側土塁線と、南側土塁線。これらの遺構を確認しています。これは、建物が集中する長者原地区の遺構配置図になります（図4）。この中で特にこの部分、丸で囲った部分に八角形を呈する建物跡、これが二棟検出されています。三〇号と三一号、それから三二号と三三号となっていますが、これは建て替えて重複しているのではないかということで、それぞれに番号が振られています。現在、南側の建物跡が、原位置からやや北側に復元されています。「八角形鼓楼」で、現在、歴史公園鞠智城のシンボルとして、見ることができます。それともう一つ、この六三号建物、それから六二号建

物、それからこの一九号建物、これが「コの字」形に配置されているように見える管理棟的な建物ではないかというふうに考えられています。遺物としてもこの周辺の五九号建物跡から当時の役人が使う刀子が出土しています。それと貯水池の取水口付近からは、硯の破片、円面硯も出ていますので、そういう意味でも管理棟的なのか役所的な機能も一部持っていた可能性が指摘されます。

（二）城門跡と城門周辺の遺構

続きまして、城門の説明です。これが最も西側にあります池の尾門跡の、調査時に確認をした遺構の写真になります（写真2）。石塁の背面、石積みが残っています。この上部に関しては、崩れて残っていません。この部分、基底面からこの範囲に石塁が築かれていたと、ちょうどこの尾根と



写真2 池ノ尾跡



写真3 堀切門跡

尾根に挟まれた狭い谷部を遮蔽するような形で石塁が築かれているということになります。そこに城内側から城外側に水を抜くような施設、暗渠状に取水口と導水溝の遺構が確認をされています。この部分が取水口です。ここから水を入れて城外に流していくこととなります。

次に、これが深迫門跡(写真4)、それからこちらが堀切門跡(写真3)になります。堀切門跡のここに見える白いものがこれが門の唐居敷からいしきです。この特徴としては、一つの唐居敷に両側に二つ軸摺穴が穿たれている珍しい形態をしています。門の遺構としての場所だとか規格、構造だとかというのがなかなか分かり難いのですが、この唐居敷は、



写真4 深迫門跡

軸摺穴と軸摺穴の間を測ることで門の、開閉する門扉の内側の幅、間隔が分かります。だいたい軸摺穴と軸摺穴の心々間が二・八メートルだったかと思います。門の支柱の痕跡も見つかっていますので、ほぼ位置的にはこの部分で間違いないだろうというふうに考えております。深迫門に關しても同じように尾根と尾根を遮蔽するような形で版築の土塁が確認をされております。先ほどの池の尾門は石塁でしたが、ここは土塁で遮蔽しているということになります。ただ、唐居敷は本来二つなければいけないところなんでしょうけれど、一石だけしか見つかっておりません。なので、門の位置や、構造などについては、今後もう少し調べていかないとはいえないという状態かと思っています。

(二) 貯水池跡

次は貯水池跡になります(写真5)。ちょうどこの部分、このカーブしたところから先に池頭がありまして、ここは池尻になります。で、こういうちょっと歪な形なんですけど、池があります。ちょうどこの尾根と尾根に挟まれた谷部に水が貯められて、生活用水など様々な用途に利用されています。調査で、貯水池の範囲を確認するために掘っていきますと、水が溜まった後に堆積する青灰色の水粘性粘土の範囲が確認できました。それを基にすると、池全体の広さが五、三〇〇㎡ということになります。平成二〇年、この池尻部分の調査で「百済系銅造菩薩立像」が出土しています。そのほか、池頭に近いところには水汲み場と考えられる「木組遺構」だとか、それから建築材などの木材を漬けこんだ「貯木場」(写真6・7)の跡ですとか、また、建築部材である蔓が巻かれた状態で水に漬けられて保存



写真5 貯水池跡（池尻 41Tr）

されている（写真8）のが確認されています。

（三）土塁の構造とその

特徴

次に、西側土塁線と南側土塁線について、ご説明します。周囲三・五キロの中で唯一、土塁線の構造が遺構として確認ができたのが、西側土塁線と南側土塁線になります。ただ、南側土塁線は先ほど言いました「くるまじ車路」や、南側に位置する肥沃な菊鹿盆地が望める位置に造られます。西側土塁線は、それよりも逆に



写真 6 貯木場跡木材検出状況



写真 7 木材および須恵器出土状況



写真 8 蔓出土状況

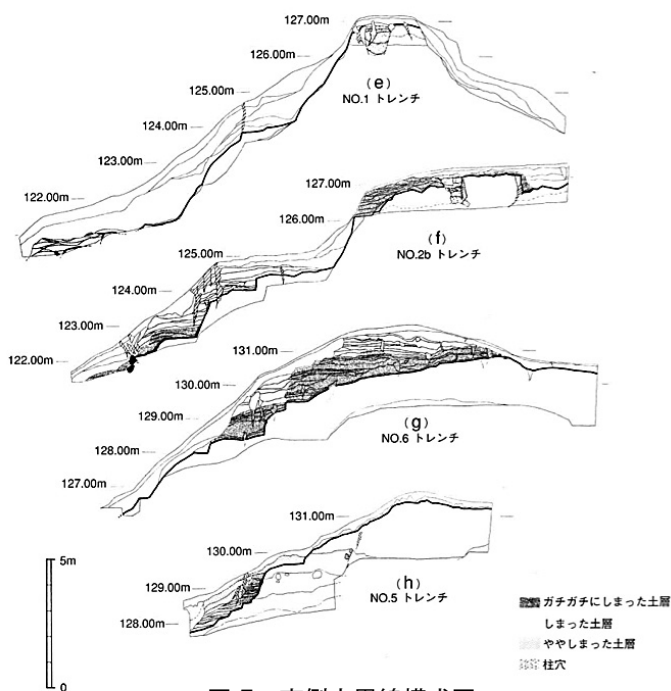


図 5 南側土塁線模式図

内側に位置しています。ですので、技術的には造り方は同じなのですが、やや土塁の高さに少し違いが見られます。南側土塁線の場合は、この2bトレンチのここからここまでではほぼ六メートル近い高さがあります（図5）。途中に一段、段を造り出します。西側土塁線の高さは、だいたい三メートルぐらいです。なので、本来的にはほぼ三メートルの高さがあれば充分機能するものと考えられます。それを南側土塁線では、外側に向けて見せるために、少し重厚感を持たせて造り上げているということが言えるのかもしれない。この黒く見えているところが、固くしまった版築状の土層堆積です。

三 出土遺物、時期区分と変遷

(一) 出土遺物

次に、鞠智城跡から出土した遺物について、ご説明をいたします。写真9は須恵器です。写真12が土師器、これらは、一般的に土器類と分類されています。鞠智城では、須恵器、土師器が主な出土遺物になります。これについては、総合報告書の中でしっかりと検討をさせていただいて、土器の時期



写真9 出土須恵器

的な変化、変遷にあわせて建物遺構、それから鞠智城全体の変遷過程についても研究を進めているところです。そのほか、先ほど貯水池の中に建築材などの木材が漬けこまれていたというようなお話をしましたが、そういったものの以外にもこういう木製の平鍬ですとか横槌ですとか、こういう農具類や工具類などの道具類も同じように貯水池の中から見つかっています。また、熊本県内でも古手になります「単弁八葉蓮華文軒丸瓦」(写真10)も出土しています。ただ、通常考えるところ先を飾る瓦というのは、建物に瓦を葺いていれば、たくさん出土するというのが本来イメージとしてあるかもしれませんが、鞠智城の場合は少ないのです。ですから部分的に使うという程度の飾り方だった可能性もあります。もう一つは、貯水池



写真 12 土師器



写真 11 木簡



写真 10 軒丸瓦

の中から「木簡」という墨で文字が書かれた遺物が出ています（写真11）。書かれている文字、内容、読み方なのですが、現時点で確認できているのは「秦人忍□五斗」。秦、人、□部分に文字が一つあるのですが見えない。次が五斗となります。ですから、五斗という単位で計られるものと考えたと「米」だろうと言うことで、「秦人の忍という人が、米を五斗納めた」ということが分かる、そういった史料になります。この木簡の意味するところで、もう一つ重要なのは通常、納税者といえますか納付者は「どこの誰々」という住所が分かるような形で、特定できる内容を一緒に書くのですが、この場合は秦人忍という書き方をされています。ということは、意外と遠くからということではなくて、近隣にその納付者がいるということをも想定しても間違いないのかなと考えられます。

もう一つ、池尻から出土しました百済系銅像菩薩立像（写真13）なのですが、これも専門の方に見ていただいて、おそらく七世紀の中頃、百済で作られたものと考えていいだろうという話もございますので、形態的な特徴などを含めて、築城当初に近い段階のものではないかな

と思っています。

(二) 時期区分

これまでの発掘調査で分かってきたことについては、総合報告書の中にも、それからいろいろなリーフレット類でもまとめてあります。で、全体としては、三〇〇年近い年数存続した期間を五期に区分して考えることができるということが確認ができています。具体的に第Ⅰ期から第Ⅴ期までについて、ご説明させていただきます。

第Ⅰ期 (図6)

第Ⅰ期については、マーキングした部分の建物が第Ⅰ期の建物群になろうかと思えます。特徴としては、掘立柱建物が作られた時期であり、また、土塁や城門、貯水池跡など、古代山城としての最低限の機能が備わった時期が第Ⅰ期です。七世紀第3四半期から第4四半期までの時期になります。

第Ⅱ期 (図7)

続きまして第Ⅱ期になります。先ほどお話をしました「コ」の字形に配置された建物が建てられます。こういう建物群の出現が一つ変化として出てきます。それから、もう一つがこの部分です。



写真 13 百済系銅造菩薩立像

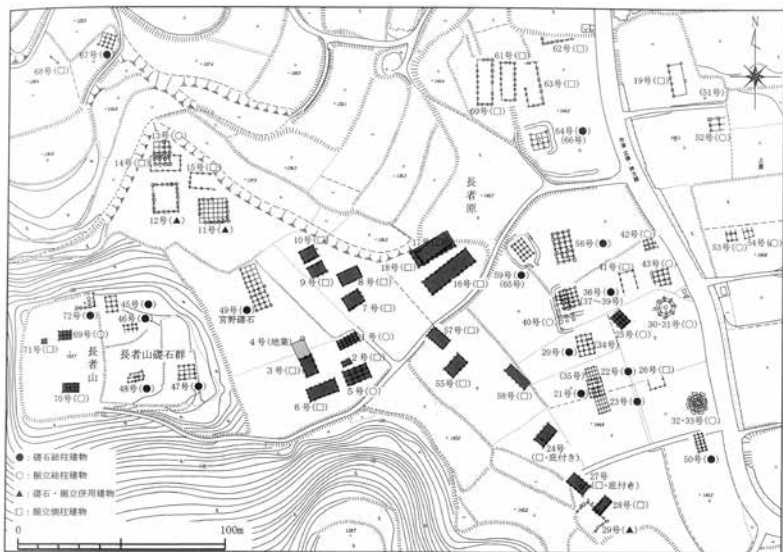


図6 鞠智城の変遷 鞠智城Ⅰ期（7世紀第3四半期～第4四半期）

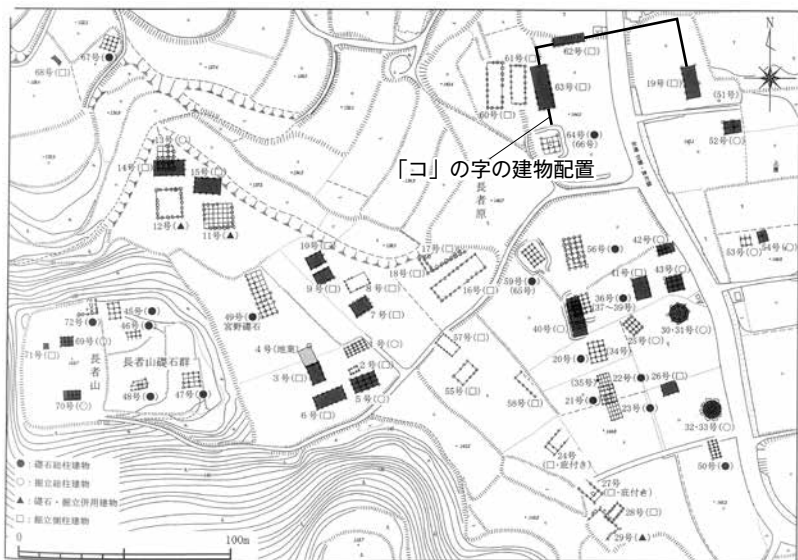


図7 鞠智城の変遷 鞠智城Ⅱ期（7世紀末～8世紀第1四半期前半）



図8 鞠智城の変遷 鞠智城Ⅲ期（8世紀第1四半期後半～第3四半期）

八角形建物が建てられます。ちょうど、『続日本紀』に記載されている六九八年の繕治の時期に該当するというふうに理解しています。これらの八角形建物やコの字形配置の建物群が出現します。ですから、こういう管理棟的な、管理的な役割、政治的、行政的な役割も少し見られるようになってくる時期かなと思います。

第Ⅲ期（図8）

次に、第Ⅲ期。八世紀第1四半期後半から第3四半期までの時期です。同じように「コの字」形に配置された建物群は継続します。また、八角形建物も存続しています。ただ、全体的な棟数は、現在、確認されているものとしてはさほど多くはありません。ちょうど、この時期は土器の出土量が極端に少なくなります。出土する土器が減少する、空白期がこの段階に見られます。なので第Ⅰ期から第Ⅱ期、

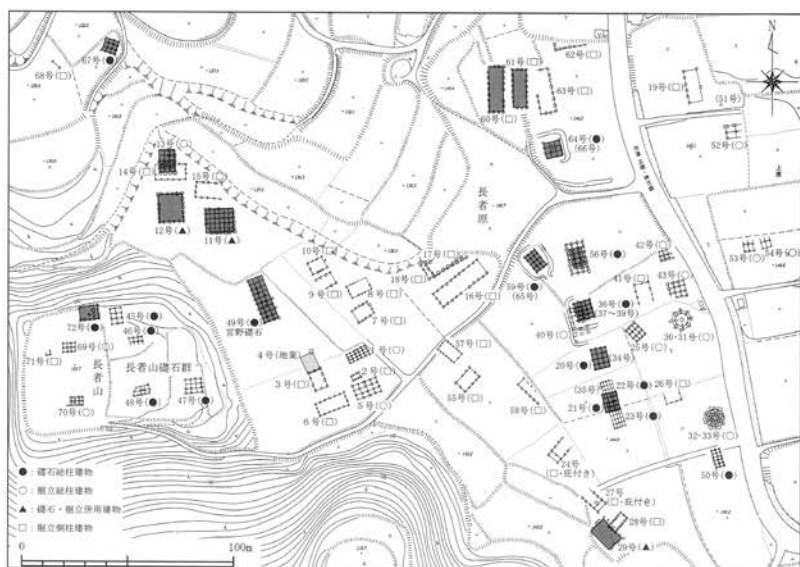


図9 鞠智城の変遷 鞠智城Ⅳ期（8世紀第4四半期後半～9世紀第3四半期）

第Ⅲ期と継続する中で、鞠智城の管理というか運営の在り方が、停滞した時期にあたるのかもしれない。ただし、墨書文字が記載された「木簡」が出ております。停滞しながらも、何らかの役割を担いながらしっかりと継続をしているという段階かと思えます。この段階に礎石建物が出現します。八世紀第1四半期後半です。いろんなところの官衙遺跡と比較しても、この礎石建物の採用、出現が早いということが特徴としてあげられます。

第Ⅳ期（図9）

第Ⅳ期になります。八世紀第4四半期後半から九世紀第3四半期にかけて、先ほどありました「コの字」形配置の建物群よりも、少し長めの側柱建物ですとか、全体の建物配置も長者原地区の中央部が空白となり、その両側に広がるようになります。ただ、第Ⅲ期に出現した礎石建物と比較して少し大型化す

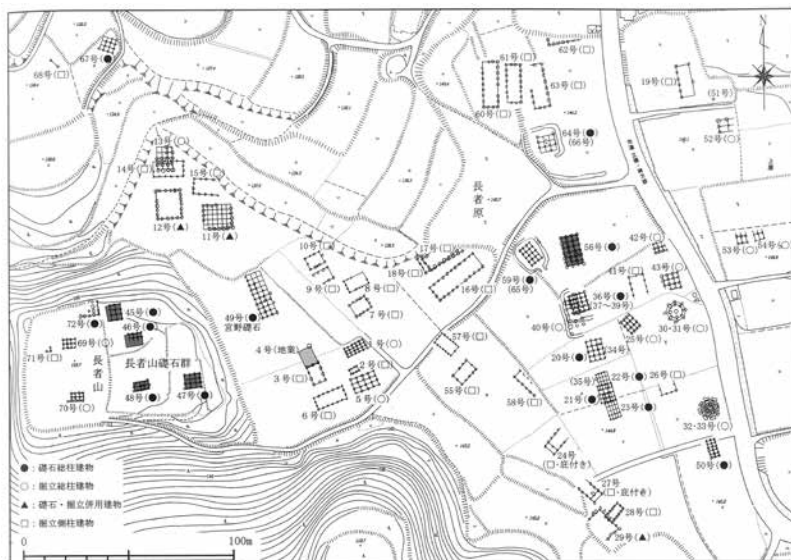


図 10 鞠智城の変遷 鞠智城Ⅴ期（9世紀第4四半期後半～10世紀第3四半期）

る時期になります。ですから、食糧の備蓄施設としての機能が少し強化された時期ではないかと考えております。

第Ⅴ期（図10）

『文徳実録』に記載されている八五八年の「鞠智城院の不動倉が一一棟焼けた」という記事が、ちょうど九世紀第3四半期にかかる頃になりますので、第Ⅳ期の終わりから第Ⅴ期にかかる過渡期でしょうか、不動倉が一一棟焼けるという出来事が起こったことになります。先ほど第Ⅲ期で停滞をしたという言い方をしましたが、停滞をした後にも礎石建物が大型化をしていきます。一般的には、不動倉が火災で一一棟も焼失すると機能が低下し、衰退していくというか、段々と尻窄んでいくんですが、建物の数は減りながらも、第Ⅴ期に至ってもまだ新しく建物が作られています。なので、倉庫としての機能は維

持されている、継続していくということになります。五六号建物跡も第Ⅴ期に建てられた大型の礎石総柱の建物になります。

まとめ

先ほども少しお話した出土土器の量について簡単にご説明します。七世紀第3四半期が築城期ということになりますが、その前の段階から若干の遺物が出土しています。歴史書に築城記事は出てきませんけど、築城期と想定される頃の土器が少量ですが出土しています。七世紀末の繕治をする時期になると爆発的に土器の出土量が増えます。その後、第Ⅲ期になると土器の出土量が大きく減少し、一旦停滞をする。さらに、八世紀第4四半期になると、また遺物が出てくる。最終的には十世紀第3四半期以降、遺物が出土しなくなります。おおよそ七世紀第3四半期から一〇世紀第3四半期ぐらいまでが鞠智城として機能した時期ではないかと考えております。

このように考え、他の古代山城と比較をすると、大野城とそれから基肆城、それから鞠智城、この三つの城は比較的長く継続していますが、そのほかの古代山城は早い段階で停廃され、遺物が見られなくなります。なので、この三つの城、要は同時に繕治された山城に関してのみ長く存続します。ですから、特別、役割を変えながらも存続した城ということが言えると思います。この表1は『月刊文化財』、平成二八年の四月号に福岡県の赤司さんが作られた表をお借りしました。結論的には、

毎年四～五名の若手研究者に鞠智城に関する特別研究に研究助成を行って、研究を進めているところです。文献史学、それから考古学を研究されている若手の方にお声をいただいて、来年度以降、是非ご応募いただければと思います。一緒に鞠智城を研究していければと思いますのでどうぞよろしくお願いいたします。

長くなりましたけれどもご静聴ありがとうございました。